

社会科・地歴科指導法における模擬授業の実践事例 —教科指導力の向上を目指して—

奈良 明

1. はじめに

公立学校教員採用試験は、4年生の4月に願書を提出し、7月に第一次試験を受け、発表後8月末には二次試験を受ける。そして10月中に二次の合格者が発表される。ちなみに2016年（平成28年）度の千葉県中学校社会科の倍率は9.43倍の狭き門であった。ここで、採用されることが決まっても、赴任先が分かるのは3月中旬以降である。3月末に辞令を受け取り4月から教壇に立つことになる。そして、早ければ教科指導が4月中旬から開始されるのである。こうしたことから学生は、社会科の教師として生徒の前で授業を展開することに大きな不安を抱えることになる。それを解消する為の指導法として、学生に対しては、模擬授業を通じ、できるだけ実戦に近い体験をさせた。また、学生同士で模擬授業の内容を議論することで、互いの向上を目指した。

2. 2012年（平成24年）と2013年（平成25年）の実践

この2年間の社会科・地歴科指導法Ⅱ（後期）において、学生による模擬授業は、受講生の学生が多かったこともあり、一展開を二名の学生で担当させることにした。模擬授業の進め方については、学生に任せることにはしたが、二人の学生が話し合って指導案を検討する時間が取れないこともあり、主に授業展開をする担当と板書事項を担当する役割に分かれてしまうケースがほとんどだった。一部に「T1」と「T2」として、指導案にその役割を明示していたものもあったが、おそらく二人の話し合いがう

まくいっていた例であった。また、授業に参加する他の学生は、生徒として授業を受け、模擬授業への率直な感想や意見を自由記載し、それをレポートとして参加状況の指標にした。記載されたものは、授業者へ渡し今後の指導方法の参考にしてもらう。それとともに指導教員より模擬授業へのコメントも手渡した。

この模擬授業を展開する1週間前には、指導案と板書事項を指導教員に提出することにした。ところが、二人で話し合った指導案とそれぞれが分担して持ってきた指導案とは大きな違いがあった。授業展開の学習課題がしっかり明示できない指導案は、授業そのものに問題が生じてしまう。少なくとも本時の学習課題をどうするかを二人で決めてこななければ始まらないのである。講義後に残って、二人から話を聞きながら、指導案の訂正や板書事項の確認、扱う資料や提示の仕方など最低でも次週に展開できるように指導するのはかなりの苦労が伴う。実施する間の一週間で二人がどれだけの話し合う時間を取れるのかが勝負になると言いきれる。学生の中には、かなり無理してカリキュラムを組んでいたり、アルバイトが入っていたりと時間調整が難しいことも理解できるが、模擬授業のための準備は、後に行う教育実習に生かされることになるため、手抜きは、許されない。以下はその実践例である。

事例（1）

地理的分野の「世界のすがたを見てみよう」を展開した二人の事後の反省文からは、T1（授業展開担当）「全体的な進行がうまくいかなかった。内容が理解されているかなどの不安があった。板書相手との段取り通りの授業展開ができなかった」T2（板書担当）「黒板の右側に偏って、バランスが悪くなった。板書スピードが遅く、相手との息を一致させることができなかった。準備不足だった。」この反省文からも分かるように、二人の話し合いの不足や準備不足がうかがわれる。指導教員からも同様に教材研究不足と相互のコミュニケーション不足を指摘した。

事例（２）

歴史的分野の「江戸幕府の成立と支配のしくみ」は二人の話し合いがしっかり行われた例と言える。始めにワークシートを用意し、前時の復習の確認テストを行い、簡単に答え合わせをした後に、本時の目標を明示した。T１の説明と同時にT２が板書を書き終わっている。また生徒にワークシートを記入させている間、T１が机間指導し、T２がまとめの表を作成していた。非常に連携がうまくいっていた。しかし、反省ではT１は、「質問する時間、書かせる時間が重要だと思った。」T２は、「御成街道まで行きつかなかったのが非常に残念だ」である。担当教員からは、資料を含めて二人で検討してきたことがしっかり授業展開に繋がっていた実践であったと伝えた。

事例（３）

歴史的分野の「近代的な国際関係」は、指導案の中で明確にT１とT２の役割を示していた。教科書の「沖縄県の設置」を読ませている間、T１は机間巡視で生徒の様子を見、T２は琉球処分後の沖縄県を板書する。このようにそれぞれの項目で明記されて、板書事項も二人で考えて、きちんとまとめられていた。T１の反省は、「全然話したいことが話せなかった。授業準備が足りないことを痛感した。」T２の反省は「板書として見やすい字を書けた。板書でうまく伝えられたか不安だ。」しっかり話し合い準備していても、実際の授業展開では指導案に書かれていない、つなぎの部分での対応に苦慮していた。

3. 2014年（平成26年）の実践

先の２年間の状況を踏まえて、学生による模擬授業について下のように一部変更した。

「変更内容」

- ・二人一組でグループを作り、各自で地理と歴史で模擬授業を行う。

- ・グループごとに模擬授業を行う単元を決める。(地歴両方)
- ・決まった単元の指導案を作成する。(二人で相談して良い)
- ・地理・歴史の実施分担を決める。二人で模擬授業を実施しても良い。

15回の講義の始めの2回は、指導案の書き方、グループの組み合わせ、グループでの実施単元と担当の決定に時間を使った。そのため13回で22名の模擬授業を行うという厳しい状況にはなったので、1回に2展開を入れて実施するようにした。その結果、前年度までとは違い、すべての学生が模擬授業を一人で展開するようになった。指導案作りは二人で行っているケースもあったが、相談相手がいることで安心感はあった。前年度までのようにペアでの模擬授業を必須にしたことから解放することで、学生一人一人が模擬授業に取り組めるようになった。共同で指導案を作成しても、実施するのは担当者であるため、模擬授業を実際に経験できるようになった。それぞれの授業者からの反省は次のようであった。

事例（１）

地理的分野の「EU発足に伴う生活の変化」は、授業展開する学生T1と板書を担当するT2と役割を分担していた。

T1は、「初めての模擬授業をやってみて、自分の指導案にはまだ改善があるのだと感じた。授業を本当にリアルに想像しながら作成した方が良かった。知識をもっと入れておくべきでした。説明が分かりづらかったり、生徒の意見に補足を付けられなかったりしたので。」

T2は、「今回は板書を担当したが、思っていたよりも黒板に文字を書くということと、意見を発表してもらったものを聞きながら黒板に書く作業が難しかった。」

担当教員からは、できる限り生徒の活動を取り入れる工夫がほしいと指導した。

事例（２）

歴史的分野の「江戸幕府の成立と支配のしくみ」は、上のT2の学生

が、歴史的分野の担当の時、板書を含めて一人で展開した。「授業をやってみて思ったのは、板書の時、生徒はやる事がなくなってしまうのではないかと不安になった。」板書だけやっていた時には感じていなかった感想です。一人で実施することの大変さに気付いた。

担当教員からは、生徒が理解しやすいように学習内容の配列に工夫がほしかったと指導した。

1 講座の中で2展開を実施してきたが、良い点としては、学生一人一人が実際に模擬授業を展開したこと。前年度よりも生徒として参加する他の学生たちのコメントがより細かく丁寧に書かれるようになった。また、他の人の良かった点もしっかりと書かれていた。おそらく自分との比較の中でのコメントではあろうが、模擬授業の大変さや難しさを経験してきたからこそその内容なのだろう。一方、欠点としては、90分の授業の中で、2展開は時間的に若干無理があり、学生に忙しい展開をさせてしまう傾向は否めない。1展開目の終了後にその授業のコメントを書かせ、その後に2展開目を実施するため50分を確保することが困難である。5時間目に講義を組んではいるが、授業時間の延長が余儀なくされ、学生の一部には不満が残ることがあった。すべて終了した後に、次週に授業を行う学生の指導案を点検しながらアドバイスをするため、さらに大きく遅れてしまうことになる。時間的に多少無理はあるが、学生のためには、やはり個人の模擬授業の経験が重要だと考えての対応である。

4. 2015年（平成27年）度の実践

受講生が増えたにもかかわらず、二人一組のグループを作らずに一人での模擬授業を実施することにした。一人になれば、負担が重くなるので準備に改善を加えた。最初の講義から模擬授業への対応ができるように、前期の最終講義の時に模擬授業の単元を決めてしまうように準備した。特に選択する単元については、地理的分野と歴史的分野の年間指導計画を資料

として用意し、その中からお互いに重複しないように条件を付けておいた。また、選択した単元については、夏休み中に少なくとも教材研究ができるよう、時間的に余裕を与えたつもりである。さらに指導案の書き方については、前期の最終講義で説明をしておいた。そして後期の一時間目には、次週以降の模擬授業担当者との事前打ち合わせができるようにした。ただし、単元が選択できていても、未だ題材が決定していない学生については、その都度催促しながら、準備時間が確保できるようにした。

事例（１）

地理的分野「地球儀と世界地図を比べてみよう」を題材として、教科書以外にワークシートや補助資料を用意して臨んだ。指導案も事前の指導通りにしっかりと書いていた。

「指導案通りに進んでいかなかったことも反省だが、一番の問題点は、授業の進め方にあった。話の内容がばらばらで、中学生であつたら、とても困ったと思う。予想した生徒の反応を少なく限定してしまったことで、内容が崩れてしまった。発問やその答えに対するための教材研究をするべきだった。」

担当教員からは、細かいシナリオを用意しておく必要があると指導した。

事例（２）

歴史的分野「弥生文化と邪馬台国」を題材として、模擬授業を展開した学生です。アクティブラーニングを意識して、指導案を作成した。

時配	学習内容・ 教師の働きかけ	予想される 子供の反応	扱う教材、 気をつける点等
導入	【省略】	【省略】	【省略】
展開	目標を書く 稲作が始まって人々の生活がどのように変化したのか知ろう 縄文・弥生それぞれの生活の様子が描かれたものを比較して、違いを考える	ノートに書く 3～4人のグループを作り話し合う	机間巡視を行い、意見を拾う。見つけた箇所 に○印をする。

上記のように積極的にグループ活動を取り入れながら、教師の気をつける点や生徒の予想される反応等を書き込んであった。さらには生徒の理解が進むようなワークシートも作成して臨んだ授業だったが、以下のような反省をしていた。

「展開の授業内容の順番で意味がないものが多かった。また、焦りすぎて、作ってきた台本内容をまるまる飛ばしてしまった。板書ももう少し考えておくべきだった。色で分けたり、タイトルを枠で囲ったりするなどの工夫がいくらでもできた。」

担当教員からは、本時の目標を押さえて臨むためにも、教材研究をしっかりとやることの重要性を指摘した。

講義が後半になればなるほど、どの学生も課題解決型の授業展開を意識してきた。しかし、実際の授業展開での反省は、発問の内容や生徒の反応に対応するための姿勢や知識に集中していた。学習内容については間違った指導が少なくなってきた。そして、生徒への受け答えや教室全体への目配せ、声の抑揚や板書の文字の大きさ、見やすい字など、少しずつ経験を積んでいくことで解消できる内容が多くなってきた。

5. 2016年（平成28年）度の実践

前年度と同様な準備をしてきた。前年度の反省にたって、早めの教材研究を促してきた。その結果、意欲的に取り組む学生が見られるようになった。実際の現場の教員でも授業研究には取り上げることが少ない題材に積極的に取り組んだ学生がいた。

事例（1）

地理的分野「身近な地域調査：地形図を使った地域調査」の授業で、千葉市の2万5千分の1の地形図を4種類（昭和7年、昭和24年、昭和58年、平成21年）用意し、3グループに分けて、平成21年の地図とAグループが昭和7年、Bグループが昭和24年、Cグループが昭和58年の地

図と比較し、何がどのように変化したのか、何がなくなったのか、何が新たに作られたのか等の視点で授業展開した。学生の反省は以下の通り。

「実際に地域調査をさせたいがために地形図を使ってグループワークをさせる点を目標として行った。アクティブラーニングをさせたいと思ったため、グループワークを行ったが、人が集まってしまうため、飽きが来る生徒があり関係ない話をさせてしまった点が失敗だった。やはり選んだ単元が難しすぎた。しかし生徒が楽しそうに受けてくれたので良かった。」

担当教員からは、「学習内容については今一步深まらなかったが、全体を通して、生徒たちが良く食いついていた。もっとはっきりと指示が通っていたら、さらに活発に活動や話し合いができた内容だった。」と指摘した。

事例（2）

地理的分野「九州地方の生活の舞台」の授業では、初めてパワーポイントを使った授業展開をした学生がいた。九州地方の地形の特色を展開する中では、桜島や阿蘇山の火山活動が、生活面でどのような影響を受けているか考えさせる資料として、「火山警報レベル」の表をインターネットからの情報としてライブで写しだした。さらに環境問題の提起として、珊瑚礁の白化現象を健康な珊瑚と比較して写しだしていた。ただし準備不足もあり本人の反省でも不十分であったことに触れている。「地形と気候の重要箇所を明記していなかったため、学習課題が分かりづらかった。資料が少なすぎた。でも授業の雰囲気は明るく保てた。」

担当教員からは、「文部科学省も推進しているICTを活用した授業展開は、今後の指導方法の中で重要なスキルになっていくものだ。残念ながら、せっかくの情報も動画で見せることができれば、生徒たちの興味関心がより強くなっただろう」と指摘した。

事例（3）

歴史的分野「鎌倉時代の文化と仏教」

授業に遊びを取り入れた展開を行った学生がいた。鎌倉新仏教についての調べ学習の後、5～6人のグループに分けて「開祖」「教義」「中心寺院」のカードを配布し、宗派にあったカードをカルタ式にとっていくというゲームを行った。学習内容としては新仏教に偏りすぎた印象が強い。旧仏教から新仏教へのつながりやその背景について、考えさせる部分が欠如してしまった。このことは本人の反省文にもしっかりと書かれていた。

「歴史の授業で遊びを取り入れた学習をとにかく考えた結果、かるた形式での学習を思いついた。しかし、それ以外の導入や展開がおろそかになってしまった。きちんとした授業をやって初めて遊びながらの学習ができると思う。」

担当教員からは、「遊びを取り入れたチャレンジ精神は評価できる。一方、本時の目標である『新仏教がなぜ民衆に広まったのか』を理解させることができたのか疑問が残る。」と指摘した。

以上のように、学生による模擬授業は、それぞれの個性に応じた発想や考え方によって、授業展開が行われてきたが、発想を実際の授業に生かせるような指導案づくりが難しかったのがよく分かる。紙ベースでの授業展開ができて、発問の内容や机間指導でのアドバイス、生徒の予想される反応との違いや個々への対応にも、戸惑うことは仕方ないことではある。しかし、このような模擬授業を繰り返し行う意欲と熱意は、サポートする指導教員のアドバイスや学生同士の励ましに支えられていくと考える。学生同士の感想は、時には厳しい指摘もあるが、良かった点をしっかりと伝える暖かさが大きな救いとなっているのである。

6. おわりに

前期の指導法では、学習指導要領における目標や内容さらには取り扱いや配慮事項について習得させてきた。加えて中学校社会科（地歴科）の基礎的・基本的知識の復習や過去の千葉県教員採用試験問題に取り組ませてきた。後期では、その知識や技能を基に、学生一人一人の社会科教員として、模擬授業を通して実践的な指導力の基礎を身につける事を主眼としている。その為の授業展開への助言や資料、発問、板書事項などに学生の意見を尊重しながら支援してきた。重要なことは、1時間の授業展開には、その3倍も4倍もの時間をかけて教材研究をしなければならない。教材研究の結果、授業に自信が生まれ、生徒の前ではベテランの教師と同様の教師であることを自覚して臨むことができるようになる。したがって、これまで取り組んできた、学生一人で模擬授業を展開させてきたことは、本講座の一番の目的であり、多くの学生も授業力を付けなければならない自覚を生んだ貴重な体験であると評価している。しかしながら、現場で求められている教員は、教科指導とともに生徒指導の力も必要である。実際、教室には「ADHD（注意欠如・多動性障害）、ASD（自閉症スペクトラム障害）、LD（学習障害）」等の発達障害のある生徒や先生の揚げ足をとる生徒、やんちゃな生徒への対応も求められる状況である。これら多くの課題の対応について、研修や同僚の先輩から知識を獲得しながらも、教員の本務である「わかる授業」を目指す教員が求められている。その為に学生である今、自ら進んで意欲的に模擬授業に取り組める学生を育成していく必要がある。

参考文献

中学校学習指導要領解説 社会編 平成20年9月 文部科学省
千葉市教育委員会報告資料 平成28年11月